

主論文要約

学位申請者 五十嵐涼介

題目 カントの論理学体系とその哲学的帰結

要約

目的

本論が題材とするのは、18世紀の哲学者イマヌエル・カントの論理学思想である。カントは西洋近世を代表する哲学者の一人としてその名を知られているが、哲学史全体に視野を広げたとしても、彼がもっとも偉大な思想家の一人に数えられることに異論のあるものはいないと思われる。彼の思想の射程は、認識論・形而上学・科学哲学・倫理学・法学・政治学・美学といった、およそ哲学として考えうるあらゆる分野におよんでおり、近代以降の哲学に及ぼした影響に至っては測り知ることすら難しい。ところが、カントの論理学思想に注目してみると、少なくとも哲学一般におけるその存在の巨大さと比べると、ほとんど等閑視されているといってもよい扱いを受けていることに気付く。このような、一見不自然とさえ言える状況が生じた原因はいくつか考えられる。その中で、もし主だったものをあげるとするならば、カントがいわゆる形式論理学を主題とした著作をほとんど残していないこと、また、カント自身が新たに構築したと自負する「超越論的論理学」と呼ばれる部門についても、実のところは認識論あるいは形而上学の一種であると見なされてきたことにその理由があると思われる。このため、これまでの哲学・哲学史研究においては、カントを研究することによって獲得することのできる「果実」はすべて、彼の論理学以外の分野に実っていると判断されてきたのであろう。

しかし一方で、カントの主著の一つである『純粋理性批判』においては、いたるところ

に論理的な概念が現われていることに気付かれるはずである。また、カント研究における様々な論争に目を向けてみても、それらの中にはカントの論理学思想に関する齟齬・誤解にもとづいているものが少なくないように思われる。そうであるとすれば、カントの論理学思想の研究は周縁に位置づけられるものであるどころか、むしろ彼の哲学全体を理解する上での基礎と見なされるべきものであると考えられるのではないだろうか。本論は、このような動機と期待のもとで、カントの論理学体系の包括的な研究を試みる。

また同時に、本論はいわゆる意味論的解釈にしたがった『純粋理性批判』読解の試みという側面ももっている。Robert Hanna は、『純粋理性批判』という書物の位置付けに関して、これを認識論・形而上学として読みとく解釈の他に、「意味の理論」(theory of meaning)として読む解釈もまた標準的なものとして認められるべきであるということを中心とし、このような立場を意味論的解釈と呼んだ(cf. Hanna 2001)。歴史的な観点からすると、このような立場は古くには Strawson (1966) や Bennett (1966) において見出されるし、また特に現代の英米圏のカント研究においては、この種の立場にたった解釈は少なくない。本論もまた、このような意味論的解釈の立場にたつことによって、『純粋理性批判』の論理-意味論的(logico-semantic)な側面に注目する。ただしこのとき本論が試みるのは、「意味の理論」という言葉から想起されるような、われわれの言語の意味一般を扱う理論ではない。そうではなく、本論が主な考察対象とするのは、カントの理論哲学がその基礎をおくところの伝統論理学における「判断」という論理的形式である。すなわち、本論の立場からは、『純粋理性批判』の「意味の理論」としての側面は、「判断」という特定の論理的形式の意味を考察した点にあると解釈される。重要な点は、このような立場にたつことにより、従来の研究においては一種の認識論あるいは形而上学であると考えられてきた「超越論的論理学」を、「判断」という論理的形式に対して具体的な意味を与える、ある種の論理的意味論として捉えなおすことが可能になるということである。したがって本論では、このような観点から、「超越論的論理学」を論理学の部門に属するものであると見なし、その論理-意味論的な側面と、このような解釈から導きだされる哲学的帰結について検討する。

結論

本論で主題とされたのは、カントの「一般論理学」と「超越論的論理学」という、二つの部門である。本論では、これらの論理学の特徴を明確に定式化するため、ライプニッツの論理学との対比のもとで検討を行なった。この結論として明らかになったのは、次のようなことである。まず、「一般論理学」は「超越論的論理学」とライプニッツの論理体系

という、二つの論理体系に共通する構造（思考の「形式」）を抜きだしたものを意味すると解釈できる。逆に、「超越論的論理学」とライプニッツの論理学は、「一般論理学」において与えられた「形式」に対して、より実質的な「内容」を与えたものがあると解釈される。本論によって与えられたこのような解釈の特徴は、これらの論理学を「概念」と「対象」の間に成りたつ「適用関係」の論理的性質によって特徴付けたことにある。まず、一般論理学は、「対象」と「概念」の間に成りたつ実質的な適用関係を捨象し、単に論理的な形式にのみ着目したものとして解釈された。これに対して、超越論的論理学およびライプニッツの論理体系は、一般論理学において与えられた「形式」に対して、「内容」、すなわち「対象」に対する実質的な関係を与える、ある種の論理的意味論として特徴付けることができる。換言すれば、このような定式化のもとでは、超越論的論理学とライプニッツの論理体系の差異は、「概念」と「対象」の間に成りたつ「適用関係」の違いによって説明されることになる。本論では、このような両者の適用関係の間の違いを、ダメットによる実在論と反実在論の定式化を援用することにより、前者を言わゆる検証主義的な性質を持った関係として、一方後者を認識独立的な性質を持った関係として特徴付けている。

また本論では、以上のような主張を論証するために、それぞれの論理体系を cod-構造と呼ばれる数学的構造を用いて形式化し、これによって得られた形式的体系が実際に望ましい性質を持つということを示している。このような形式化では、まず cod-構造によって「判断」を解釈するための形式的な「モデル」を定義し、これにもとづいて「判断」間の帰結関係を定義した。その上で、一般論理学・超越論的論理学・ライプニッツ論理学という三つの論理体系に対応する形式体系が、それぞれの特徴から見て適切であると考えられる論理的性質を持つということを示している。

さらに本論は、このような形式的モデルを応用することにより、分析／総合判断の区別とこれに対応する「徴表」の分類、存在概念、およびアンチノミー論に対して論理的な分析を加えている。このような結果は、本論で与えられた論理学についての理解が、カントの理論哲学全体の理解に対して寄与されうるということを示している。

以下では、個々の章について、その内容の要約を記載する。

第1章 批判哲学と論理学

本章は、議論の主題となるカントの「論理学」について総合的な見取り図を描くことを目的としている。この章ではまず、カントの論理学思想においてもっとも重要な「一般論理学」および「超越論的論理学」という二つの論理学の区分を紹介し、その特徴を整理する。次に、この二つの論理学を区分するところの「形式」と「内容」という概念について

詳細に検討し、両者の内実および相互関係を明らかにする。最後に、本論を通じて重要な比較対象となるライプニッツおよびダメットの思想を取りあげ、これらがカントの思想とどのような差異・類似性を持つのかについて論じる。

第2章 概念と判断の論理的意味論

この章では、カントの一般論理学に対応する論理体系を形式的に定義することを目的とする。本章ではまず、考察する形式的体系の意味論となる概念と対象の数学的構造を与え、この構造に基づいて判断に対する形式的な真理条件を与える。また、ここで定義される数学的構造を用いることで、カントの超越論的論理学とライプニッツの論理学に対応する形式的体系の特徴付けを、一般論理学に対応する形式的体系のある種の拡張として定義することが可能になる。

第3章 超越論的論理学

前章までの議論においては、「一般論理学」が「対象」への実質的な関係性を捨象した「形式」のみを含むものとして定式化された。これに対して本章では、「超越論的論理学」が取り扱うところの認識の「内容」、すなわち「概念」と「対象」の関係性が主題となる。この章では、まずライプニッツの論理体系において「概念」と「対象」の関係がどのように考えられていたのかを概観し、そこから導出される論理的な性質を特徴付ける。次に、ライプニッツの論理体系と比較する形で「超越論的論理学」における「概念」と「対象」の適用関係を考察し、同様にこれが論理的な観点からどのような帰結をもたらすのかを考察する。最後に、「超越論的論理学」の特徴とカントの哲学思想の関連性について検討し、その哲学的帰結と意義を明らかにする。

第4章 単称判断の問題

この章では、前章までの議論では一旦保留されてきた「単称判断」の分析を行ない、論理的な観点からこの種の判断に対する真理条件を与える。本章ではまず、これまで提出された「単称判断」の解釈を概観し、このうちでもっとも妥当であると考えられるものにしたがって、「単称判断」の形式的な意味内容を特定する。次に、「単称判断」の特徴となっている主語の「単称性」に着目し、このような条件がカントの理論の内部でどのように与えられるのかを検討する。

第5章 無限判断と形而上学

本章では、前章までで定義された論理的分析を下敷にしながら、無限判断の内実および形而上学との関係を明らかにする。この章ではまず、カントが無限判断に対して与えた特徴付けを概観した後、これまで与えられてきた解釈を検討し、その問題点を指摘する。次に、前章までで与えられた形式的分析を元に、無限判断の特徴をよりよく説明しうる解釈を提示する。最後に、このような考察によって得られた無限判断理解を応用することにより、カントのアンチノミー論についての論理的な分析を与える。

参考文献

- Bennett, J. (1966). *Kant's Analytic*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hanna, R. (2001). *Kant and the Foundations of Analytic Philosophy*, New York: Oxford University Press.
- Strawson, P. (1966). *The Bounds of Sense: An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*: Routledge. (Reprinted in 2006).